

桜 歯 ニュース

2020. 1. 15
VOL.205



日本大学歯学部ホームページ： <http://www.dent.nihon-u.ac.jp/>



学びの喜びを

学務担当 今村 佳樹

日本大学歯学部集う学生の皆さん、保護者の皆様、あけましておめでとうございます。令和になって初めての年が明けました。皆さんは新しい時代を拓く希望に満ちていると思います。さて、令和に入り、高等教育の学びの場は大きく変革を遂げています。日本においては18歳未満人口の減少に伴って大学の入学は広き門となっています。また、高等学校等就学支援金制度、高等教育の修学支援制度の導入によって高校における実質的な授業料の無償化、大学における給付型奨学金制度の拡充が実現しました。これは、それまで環境が整わず歯学部への進学を諦めざるを得なかった人にとっては大変な朗報であると同時に、これにより歯科医師になる明確な意思を持たない人にとっても歯学部が近い存在になったといえます。歯学部では、入学時に歯科医師になることが義務付けられます。他学部の学生が大学卒業時に職業を選択することを考えると、大学入学時に将来の職業を決定しなければならないのは負担かもしれません。しかし、皆さんが歯科医師になる確固とした意志を持って歯科医学を学ぶことの喜びを自覚し、毎日の生活に生きがいを感じれば、日本大学歯学部は歯科医学を履修する皆さんにとって間違いなく最善の場所です。令和2年度からは中長期的なカリキュラムの再編に取り組みます。学生の皆さんの快適な履修環境を提供し、学修をサポートします。

(教授 口腔診断学講座)

論文のすすめ

研究担当 佐藤 秀一



昨年度の「大学院のすすめ」に続き、本年度は「論文のすすめ」、つまり、論文を書くことについて考えてみたいと思います。毎年、歯学研究科大学院に入学してくる多くの学生の進学動機は

博士号を取得するためだと思います。博士号を取るためには研究を行い、その過程や結果をまとめた論文を書かなければなりません。

それでは、論文を書くことには、どのような理由や意義があるのでしょうか。もちろん、一つは博士号を取得するためです。その他、自分の研究を世界や後世に伝えること、専門分野の研究に貢献すること、臨床の向上と医学の発展に貢献していくことなど、さまざまな理由が考えられます。論文を書くことは、研究結果の良し悪しに関わらず、医療、医学発展への大きな貢献となります。つまり、研究論文を提出することは、研究者にとって義務でもあります。研究者にとって研究を行ったからには、「論文を書かなければ何も残らない」といっても過言でないかと思えます。

歯学研究科大学院では、初年度の総合特別講義で英語論文の書き方について2回の講義を行っています。そこでは、英語論文のしくみや構成、投稿の仕方、そして論文の具体的な書き方について、できるだけわかりやすく解説しています。また、論文は英語で書くことが基本だと思います。英語は世界の共通語なので、自分の研究を世界に発信するために英語は必須です。本学の大学院特別講義では外国人研究者を招聘し、生の英語の講演を聞く機会をなるべく多く設けるようにしています。

歯学研究科では、入学したすべての大学院生が素晴らしい論文を書くことができるように、優秀な教員達が丁寧に指導してくれます。来年度も多くの卒業生に本学部の大学院に入学していただけることを期待しています。(教授 歯科保存学第Ⅲ講座)



奨学金について

学生担当 宮崎 真至



本学部では、学生の修学を支援するために様々な奨学金制度を有しています。これには、日本大学および歯学部をはじめとして、学外の奨学金財団による奨学金制度があります。必要に応じて活用下さい。

1. 給付型奨学金

- | |
|---|
| 1) 日本大学特待生:学業成績優秀にして品行方正な学生に対し、毎年度選考の上、特待生として、いずれかの奨学金を給付(甲種:授業料1年分相当額の半額及び図書費12万円、乙種:授業料1年分相当額の半額) |
| 2) 日本大学創立130周年記念奨学金:経済的理由により学費等の支弁が困難である学部生(年額30万円) |
| 3) 日本大学事業部奨学金:経済的理由により学費等の支弁が困難であり、学業成績が優秀な学部生(年額24万円) |
| 4) 歯学部佐藤奨学金(第1種):学業成績が優秀な学部生(年額20万円あるいは10万円) |
| 5) 歯学部佐藤奨学金(第2種):課外活動等に顕著な功績のある学部生(年額10万円) |
| 6) 歯学部佐藤奨学金(第3種):海外で開催される学会で研究発表をする2~3年の大学院生(年額上限50万円) |
| 7) 歯学部同窓会奨学金:学業優秀で課外活動に顕著な成果を収め学部の発展に貢献した学部生(年額10万円)および学部学生への学習指導貢献が顕著である大学院生(年額5万円) |
| 8) 日本大学古田奨学金:学業成績が優秀で人物が優れている大学院生(年額20万円1名) |
| 9) 日本大学ロバート・F・ケネディ奨学金:学業成績が優秀で人物が優れている大学院生(年額20万円1名) |

2. 貸与型奨学金

- | |
|--|
| 1) 日本大学歯学部佐藤奨学金:人物が優れ、不測の事態により経済的理由等で学業継続が困難な学生(高学年)に対して選考の上、授業料相当額を限度に日本大学歯学部が貸与。 |
| 2) 日本大学歯学部後援会奨学金:人物が優れており、将来歯科医師として有望であること。経済的理由により学費の納入が困難であり、かつ他の奨学金による支弁が受けられない5年生以上の学生(原則として当該年度の授業料相当額以内)に貸与。 |

3. 学外の奨学金

- | |
|--|
| 1) 日本学生支援機構の奨学金:学部生及び大学院生には「第一種(無利子貸与)」、「第二種(有利子貸与)」があり、多くの学生に貸与されている。将来の返還については、次の世代の奨学金となるため、厳格な仕組みで運用されている。なお、令和2年度、家計の経済状況により授業料等減免・給付型奨学金が新設された(http://www.jasso.go.jp/)。 |
| 2) 森田奨学育英会奨学金:大学又は大学院に在学し、学業・人物ともに優秀かつ健康と認められる者に対して、選考の上奨学金が給付。 |
| 3) その他の制度:提携教育ローン制度等もあり、上記を含めて詳細は学生課まで。 |

(教授 歯科保存学第Ⅰ講座)

2020年度 臨床研修歯科医師 選考試験について



卒後教育担当 外木 守雄
(教授 口腔外科学講座)

総合診療科長 紙本 篤
(准教授 総合歯科学分野)

本学部附属歯科病院臨床研修歯
科医の選考試験は、2019年7月

准教授 紙本 篤 27日に実施されました。採用定員140名のところ、学外からの志願者を含め昨年度より多い総数260名の受験者でした。この臨床研修制度は平成18年4月から必修化され、歯学部生にとっては『就職試験』という位置付けになっております。本学部では、より豊富な臨床経験を獲得することを目的として、協力型臨床研修施設と連携を図る複合研修方式プログラムの募集人数を増加、単独研修方式プログラムを少数精鋭の形式に変更しました。これにより、研修歯科医一人当たりの経験症例数を増加できるように本年度より改正しました。選考基準は「書類審査」、「面接」及び「筆記試験」で構成されております。本学部生に対しては、「面接」が免除されており、在学中の学生生活における「生活態度」がそれに該当する形で評価され、「生活態度」は「授業態度」をはじめ「出欠席状況」・「部活動」・「学内外における学校行事への参加状況」・「表彰歴」などが総合的に判断されます。また、「書類審査」では5年次までの「学業成績」などを評価します。一方、他大学受験者に対しては、本学部生達と切磋琢磨して研修することを踏まえ、周囲に配慮しながら自己主張のできる人材を選考することを目的として、「面接」の方法を集団面接にしております。本学部での研修を希望する学生は、低学年より有意義で充実した学生生活を送り、「筆記試験」や「学業成績」に対応するうえで、より一層日々の自主的な学習に取り組んでいただきたいと思います。本歯科病院にマッチングした結果は以下の通りです。

	志願者	受験者	S	C	O	P	R	CD	合 計
本学部6年生	136	136	22	14	5	27	18	9	95
本学部既卒者	56	55	4	12	0	0	11	5	32
他大学出身者	68	68	1	1	0	0	10	1	13
合 計	260	259	27	27	5	27	39	15	140

なお、プログラム詳細については日本大学歯学部ホームページを参照してください。

本歯科病院にマッチングした方はもちろんのこと、本学部の6年生全員が歯科医師国家試験に合格し、2020年度の歯科医師臨床研修を開始できることを祈念致しております。

解剖体追悼法要

岩佐 幸範

2019年10月26日、築地本願寺にて本学の人体解剖学実習のために御献体下さった方々への追悼法要が行われました。第2学年になり、医学の道の第一歩となる解剖学が始まり、全身の骨や筋肉、血管や神経など、前期中は座学での暗記の日々を送っていました。

しかし、後期になり人体解剖学実習で実際に御献体を解剖させていただくことは、仕組みを理解し、知識の定着を遥かに高める時間となりました。何より、自らの身体をこれからの医学発展のために捧げてくださった方の篤志、御遺族の深い理解に接して一人間として道徳心を学ぶことができたということは、人生において大きな体験だと思えます。

私達は一回一回の実習でその思いを心に刻みながら、医学の道に進んだ私達にしか体験できないことだと、一つ一つの臓器や血管、神経を丁寧に剖出していきました。考えや思想が異なるように、体の構造も人によって少しずつ異なっています。この「少しずつ異なる」というのが学びや知識の幅を広げることにつながっているのだと思えました。世間では、「歯学部なのになぜ全身解剖するの?」と思う人もいるかもしれません。しかし、それは単に歯科的知識を育むのではなく、実際に全身を解剖することで医学的知識を培い、自分が普段口にしたものがその体を作り上げるといふ神秘を学ぶことにあると思えます。そして御献体と向き合うことで命の尊さを間近で感じることができるからだと思っています。追悼法要では、その意識を再確認することができました。

この人体解剖学実習を通して、御献体下さった故人、御遺族の方々、そして諸先生方に感謝の意を表し、これからの勉学に精進したいと思います。

(第2学年)



学部を超えた交流 「ワールド・カフェ」

佐藤 紀子

日本大学は広い範囲に及ぶ学問領域を擁する我が国最大の私立総合大学です。しかしながら、日々の学生生活の中には、歯学部生が他学部生と交流する機会はほとんどありません。そのような中、近年、スケールメリットを活かし、学問の垣根を越えて多様な価値観や考え方に触れることを目的とした行事が多数開催されています。全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎2」の一環として開催される「ワールド・カフェ」(10月20日)は今年度で3回目を迎え、第1学年の学生が参加しました。また、学長特別研究「スポーツ日大によるアンチ・ドーピング教育研究拠点確立とポストオリンピックへの展開」の関連事業である「第1回学部連携 アンチ・ドーピング ワールド・カフェ」(9月28日)が開催され、歯学部から7名の学生が参加。医学部、松戸歯学部、薬学部、スポーツ科学部の学生とアスリートの健康とアンチ・ドーピングについて意見を交わしてきました。(准教授 健康科学分野)

初年次教育「ワールド・カフェ」 に参加して

山岸 佳子

今回のワールド・カフェでは、「豊かさ」というテーマについて話し合いました。会場に着くまでは話が弾むか不安もありましたが、自己紹介をしていくうちにそれぞれの趣味や学校生活の話で盛り上がり、あっという間に打ち解けることができました。普段の学校生活では、歯科医師という同じ目標を持つ仲間と共に学んでいるため、他学部で違う夢を追う仲間の様々な視点からの意見を聞き、多様な価値観に触れることができました。また、他学部の学生の前向きな姿から、自分自身の学修やクラブ活動に対する意欲が向上し、とても有意義な時間を過ごせたと思います。今回得た発見や学びを今後の学校生活に活かしていきたいと思っています。



初年次教育科目「自主創造の基礎2」ワールド・カフェ

(第1学年)

学長特別研究「アンチ・ドーピング ワールド・カフェ」に参加して

片海 圭央

「精神の弱さが生み出したもの」現役アスリートの多くはドーピングをこのように捉えている。日進月歩、科学の発展とともにドーピング検査も精密なものとなってきているが、ドーピング行為は未だに行われており、完全に防ぐことは出来ていない。それはイタチごっこをするかのように血液やホルモンなど生体内の物質を利用したドーピングなど常に新たな方法が開発され続けているからだ。ドーピングを生み出すのは競技成績に固執してしまったアスリート本人だけでなく、同じく固執したスポーツドクターや政府がこの現状を生み出しているのではないだろうか。初めて開催された学部連携によるアンチ・ドーピング ワールド・カフェであったが、多角的な視点から社会問題を見つめることができた。広い視野を持つためにも、今後もこのようなイベントに、継続して多くの学生に参加してもらいたいと思う。(第2学年)

二つのワールド・カフェに参加して

大山 泰世

初年次教育、学長特別研究、二つのワールド・カフェに参加した。どちらのイベントにおいても、他学部生と交流を深めることができた。特に、アンチ・ドーピング ワールド・カフェには、スポーツに関心のある学生が目的意識を持って集まっていた。アスリート、ファン、医療人を目指す者など、あらゆる目線から「アンチ・ドーピング」について多角的に考え、話し合えた。グループワークを通して、スポーツの価値を再認識することができた。

初年次教育のワールド・カフェでは、「豊かさとは何か?」をテーマにグループごとで話し合った。学部によって将来目指すものが違うこともあり、同じテーマでも違った意見が出た。考えたことすらなかった観点から物事を見ている人が沢山いることを感じた。短い時間ではあったが、グループのメンバーと仲良くなることができ、これから歯科医師を目指すにあたって、他学部で頑張る仲間と負けぬよう、頑張らなければならぬと刺激をもらえた。(第1学年)



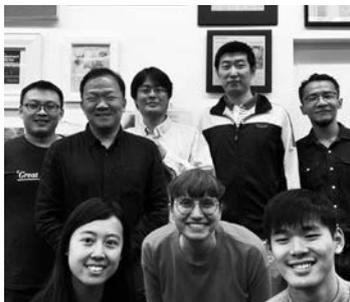
アンチ・ドーピング ワールド・カフェ 歯学部からの参加学生

トロント大学留学記

山本 清文

平成30年より1年と4ヶ月間、カナダ・トロント大学生理学講座に日本大学海外派遣研究員として滞在した。所属したMin Zhuo研究室は、慢性疼痛動物モデルで生じる前帯状回や島皮質といった「痛み」に関連する大脳皮質でのシナプス伝達長期増強応答(LTP)に焦点を当てている世界屈指の研究室であった。私にとってLTPは取り組んでみたい研究テーマの1つであり、これまでの経験を存分に生かせる「島皮質」でのLTPの研究は、知識と技術を高める為に願ってもないチャンスだった。

実際にラボに入ると、ボスのMin、秘書さん、中国人のポスドクと自分を含め4人だけのこぢんまりとしたラボであった。LTPを誘発させてその記録を収集するといっても、簡単ではなく、神経細胞(ニューロン)を観察するための顕微鏡のセットアップから、電気的な神経活動を記録するための実験装置や、それを動かすためのパソコンのセットアップが必要である。そのための機器がストックルームに積んであったため、埃を払い必要な機材を実験台に設置するという作業が続いた。留学から8ヶ月間、私とボスの2人だけで、広い部屋を共有する事ができ、必要な時にはいつでもディスカッションが出来るという、リラックスしつつも充実した日々を送ることができた。その中で、Minの何事にもポジティブな思考にはいつも驚かされた。この留学を通じて彼の持つLTPに関する知識を吸収し、自分の持つ実験技術を存分に発揮し、島皮質でのLTP誘発の新しいメカニズムを発見することが出来た。留学後半では、次々に中国からの留学生とトロント大の韓国留学生が加わり、データ測定の援護射撃(手助け)をしてくれた。



お返しにと、短期間ではあるが、自分の知識の全てを彼らに伝授したつもりである。中国人の彼らの勉強熱心さと、打たれ強さ、粘り強さにはいつも感心した。我々も負けてはいられない!

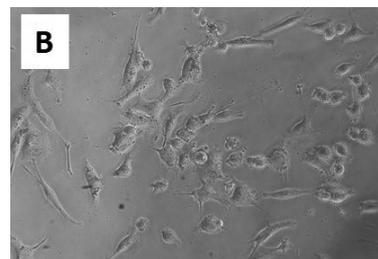
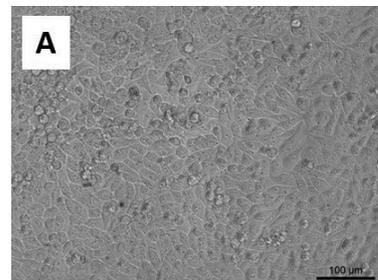
長期にわたる留学を快諾して下さった小林教授をはじめ、薬理学講座のメンバーと留学中の講義などを代わって頂いた藤田教授にはこの場を借りて感謝申し上げたい。(助教 薬理学講座)

いま夢中です、
この仕事!

副作用の少ない抗腫瘍薬 開発のための基礎研究

藤原 恭子

私の研究分野は腫瘍学です。最初に研究を始めた頃は、脱毛の仕組みの解明といった全く異なる研究に携わっていましたが、その時に所属していた研究室が不祥事で潰れてしまい、大急ぎで見つけたポストが国立がんセンターの契約研究員だった、というのがこの分野に参入した経緯です。きっかけは割と悲劇的でしたが、腫瘍学は学問として非常に興味深い上に、研究成果が社会貢献につながる可能性が高いということで大変やりがいがあり、かれこれ20年ほどこの分野にいます。一昨年10月に歯学部に来てからは、口腔がんを主な解析対象として研究を続けております。今行っている研究のテーマは大きく分けて「がんの発生・進展に関連する遺伝子の機能解析」と「がん細胞だけを特異的に殺傷する技術の開発」の二つになりますが、後者に属するものとして最近、菌類から抽出された新規のポリエチレングリコール化合物(PEG-X)が、口腔がんを含む各種腫瘍細胞に対して強い殺傷能力を示す一方、正常細胞に対してはほとんど毒性を示さないことを見出しました。PEG-X投与後の細胞のDNA損傷応答や、酸化ストレスの有無、栄養飢餓状態への反応性など、多くの観点から細胞機能を調べた結果、この化合物が細胞のエネルギー代謝系を変化させ、細胞死を誘導することが判ってきました。しかしながら、なぜPEG-Xが腫瘍細胞に対してのみ障害性を持つのかは現時点では不明です。このPEG-Xの作用機序を解明し、副作用の少ない新規の抗腫瘍薬として開発することが今現在の最も大きな目標です。興味のある学生達は研究室を見学しに来てください。研究内容についてより詳しくご説明いたします。(准教授 解剖学第I講座)



PEG-X 存在下または非存在下で48時間培養したヒト膵がん細胞株 MiaPaca2。
A) 非投与 B) PEG-X 1mM 投与

なぜPEG-Xが腫瘍細胞に対してのみ障害性を持つのかは現時点では不明です。このPEG-Xの作用機序を解明し、副作用の少ない新規の抗腫瘍薬として開発することが今現在の最も大きな目標です。興味のある学生達は研究室を見学しに来てください。研究内容についてより詳しくご説明いたします。(准教授 解剖学第I講座)

随 想

努力した人は

事務長 谷内 英之

私は、本学法学部の出身である。歯学部とは異なり、将来どのような職業に就くか未定の学生にとってはつづしがきく学部である。アルバイトや麻雀などで授業をさぼりまくる学生も結構存在した。そんな学生でも卒業ができた。定期試験前には、学部周辺のコピー店に列をなし、まじめな学生から借りたノートや先輩から入手した過去問をコピーし、定期試験を突破するのである。1000人収容できる大講堂が割り当て教室となっている科目があった。普段の授業の出席学生数は10人程度なのに定期試験時には大講堂が満杯になる。授業に出席していないのであるから、当然大半が不合格かと思いきや、その科目を落としたという者はほとんど聞かない。また、合格点をほとんど与えない熱烈な巨人軍ファンの先生がいた。この先生がある日の授業でこのようなことを言った。かつて、試験問題に対する解答ではなく、巨人軍全選手のプロフィールを詳細に書いた答案があった。これだけの記憶力なら真面目に勉強すれば合格点を取れたであろうと考え、結果的に合格点を与えた（翌年度同じような答案を提出した学生がいたが、不合格にしたとのこと）。

もちろん法学部にも司法試験合格や公務員試験合格などの目的をもって入学している学生は存在し、そんな学生は、低学年から必死になって頑張っていた。私が受けた授業の中で、色付き眼鏡をかけてほとんど教科書を読むだけの授業を行う先生がいた。この先生が、1日15時間勉強すればあなた方も3年間で司法試験に合格しますよ、と言ったことがある。大した授業もしないのに何を言っているんだろうと思ったが、あとで聞いたところによるとこの先生は司法試験に3番で合格したそうである。この先生が在学していたころは司法の日大と言われ、日大法学部も結構な実力を持っていたと思われるが、そんな大学に入学しても本人が気を抜かずに頑張った成果である。

私が過ごした学生時代と比べると今の歯学部の学生は大変だと思う。授業は大半が必修科目であり、欠席する自由もない。法学部の学生と違って、努力組とさぼり組の選択の余地はない。歯科医師国家試験合格に向かって努力するのみである。先生方がいくら頑張っても学生本人が努力しなければ卒業すらできない。努力した結果全学生が歯科医師になる目標を達成することを祈っている。

第11回EFICに参加して

小林 真之

研究者の駆け出しだった頃、学会へ参加する意義がよく分からなかった。情報は論文から収集できるし、学会発表は恒久的なものではないから価値がないと思っていた。今思えば、のんびりした分野で研究していたことが、そう考えた一因だと思う。競争的分野では様相が随分異なる。多くの場合、新しい手法の核心は論文に載せないし、そもそも論文が信用に足るか否か疑念を抱いている研究者も多い。そんな環境下では学会が重要になってくる。マン・ツー・マンで質問と答えのやりとりをすると、その研究者の力量を簡単に推察できるし、逆もまたしかりである。だから学会発表は研究信用度を上げる絶好の機会であり、逆に安易な発表をすると信用を失う最悪の機会となる。一度失った信用を取り戻すことは難しい。

例年、3万人が集まる北米神経科学学会に参加し、溢れんばかりのエネルギーに触れてその度に落ち込んで帰国する羽目になっていたが、今年は生理学講座の岩田教授にお誘いいただき、気分一新、疼痛治療の潮流を把握できるヨーロッパ疼痛学会（昨年9/4-7）に参加した。バレンシアの会場周辺は住宅しかなく、学会場にほぼ缶詰状態だった。会場内の移動は便利だったものの、狭くて立ち見が出る会場が多いのは残念だった。新しい鍵分子に関する知見は大きな収穫だった。それにしても、比較的ゆっくりじっくりデータを紹介するヨーロッパの研究者に比べて、アメリカの招待講演者が繰り出す圧倒的なデータ量を早口でまくし立てる発表には正直辟易した。「合間の時間に観光を…」と密かに期待していたが、街には大きなカテドラルがある位で、ここはのんびりしに来る処だと悟った。せめてもの救いは、薬理学講座恒例の美食倶楽部を夜な夜な開催できたことだろうか。（教授 薬理学講座）



会場で記念撮影。左から浅野(診断)、小林(薬理)、岩田(生理)、千喜良(麻酔)、中谷(薬理)、野間(診断)。

「ナナメの会」をご存知ですか

同窓会ナナメの会 (学41) 岩崎 圭祐

同窓会には、「ナナメの会」(正式名称:クラス、クラブOB・OG連絡会)といわれる委員会があります。同窓会の事業の一つで、同窓の各世代の縦のつながりと学年の横のつながりをナナメにつなぐことで、さらに強い絆をつくることを目指して活動しています。そして、この思いをこめて、「ナナメの会」という通称がつけられました。

この会は毎年7月の第1土曜日にカジュアルなパーティー形式で開催されており、本年度で7回目の開催となりました。参加者は200名ほどで、関東近隣そして遠方から、多くの同窓、そして学生の代表の方々にも出席していただいています。同窓会の集まりと聞くと堅苦しいイメージを持たれる方も多いと思いますが、そのような事は全くありません。ビュッフェスタイルの食事を召し上がっていただきながら、アトラクションや抽選会を楽しんでいただける内容となっています。ここでは、仲間との再会はもちろん、新たな出会い、業界の情報交換あるいは大学関係者との交流など、我々のルーツである日大歯学部関係者が大勢集まる数少ない機会だと思えます。また、若手の方々の参加をサポートするため、卒後10年までの参加費は半額となっています。そして、夫婦割も設定しており、お子様の参加も大歓迎です。「ナナメの会」ではこの様な交流の機会をつくることはもちろん、今後は同窓の方々を結びさまたまなサポートを充実させるような取り組みを考えています。

この「ナナメの会」について桜歯ニュースをご覧の方々にも是非知っていただき、有効にご活用いただけます様、どうぞよろしくお願いいたします。



第36回関東臨床歯科 麻酔懇話会学術集会

準備委員長 関野 麗子

令和元年6月29日に、第36回関東臨床歯科麻酔懇話会学術集会が、本学歯科麻酔学講座の主催により、創設百周年記念講堂で開催されました。

本学術集会は、日本歯科麻酔学会の関連学会として、関東近郊の歯学部歯科麻酔学講座、病院歯科、その他施設の歯科麻酔臨床に従事している多くの先生方が参加し、日常臨床で感じている



疑問や貴重な症例報告などについて発表し活発な討論が繰り広げられます。また、若手の先生の学会発表デビューの場ともなっています。

歴史ある学術集会を本学で開催するに当たり、新設したばかりの創設百周年記念講堂を会場とし本学の歴史と伝統を学外にアピールできる機会に恵まれたと同時に、失敗できないという重圧にも悩まされました。

我々の講座は人数が少なく、また、近年学会を主催した経験もなかったため、大会長とともに約1年半前から手探りで準備を進めてきました。事前準備では特に、演者からの抄録の回収やプログラムの作成、会場のインターネット環境の配備、協賛企業などとの渉外など初めて経験することばかりで悪戦苦闘しました。学術集会当日は、進行時間のずれへの対応、会場内温度環境の調整などに苦慮しました。今まで参加者として参加してきただけの学会を、主催者側の立場でみると初めて見たことが多く、とても勉強になりました。

準備委員長としては不馴れで不手際も多々ありましたが、有意義なご発表を頂きました演者の先生方、座長の先生方、そして何より当日それぞれの役割を全うしてくれた歯科麻酔学講座医局員の先生方のご協力により、無事閉会を迎えることができました。この貴重な経験を今後の麻酔臨床や研究や学生教育などで多めに役立てていきたいと思えます。

(助教 歯科麻酔学講座)

桜歯祭を終えて



桜歯祭実行委員長 尾崎 恵悟

桜歯祭が終了いたしました。2日間の開催を予定しておりましたが、台風の影響で土曜日は中止となりました。委員会として準備してきた全ての企画を行いたいという思いもありましたが、第一に学生そしてご来場いただいたお客様の安全を考えなくてはなりません。当日は企画の中止や時間短縮など多くの変更点が生じ、戸惑うこともありましたが、委員やクラブの学生などの協力のおかげで、企画を行うことができました。運営をすることの難しさを改めて感じると同時に、委員長としての活動は貴重な経験となりました。

最後になりますが、桜歯祭の開催にあたりご協力いただきました教職員の皆様、委員、参加して下さった学生の皆様に感謝申し上げます。(第4学年)

桜歯祭副実行委員長

上田 光華

昨年度までは実行委員として、今年は幹部として桜歯祭に参加させていただきました。幹部の先輩方の努力を身近でみていたため、台風により1日となってしまう事が心苦しかったです。来年度は先輩方の想いを繋げ、より良い桜歯祭となるよう実行委員一丸となって頑張ります。(第3学年)

企画統括

志岐 日向子

私は企画統括として運営に携わせて頂きました。今年度は台風の影響により、直前に大幅な変更をせざるを得ない企画が複数ありました。しかしこの状況だからこそ、桜歯祭は多くの方の協力がなければ成立しないことを、身をもって実感できたように思います。当日は楽しむ姿を沢山みることができました。(第4学年)

カラオケ大会企画長

岸本 紫央里

1つの企画が企画として成り立つために何人も人の手を借りているのだと改めて実感する学園祭となりました。組織は1人では成り立ちません。今後そういった場面に立ち会った時、楽しむだけでなく何かできることがあれば手を貸す努力をしたいと思いました。今回支えてくださった先生方、お世話になりました。(第4学年)

学校内企画長

西村 優香

2年生から桜歯祭委員として参加し、最後に学内の企画長を務めさせて頂き、大変なこともありましたが充実したものだと思います。台風によって2日目が中止になりましたが、桜歯祭が盛況のうちに終わり嬉しく思うとともに、ご協力頂いた教職員の方々や委員、学生のみなさんには感謝申し上げます。(第4学年)

大講堂企画長

市川 尚樹

今年度の桜歯祭では中夜祭と後夜祭の企画長を担当させていただきました。残念ながら中夜祭は台風の影響で中止になり、後夜祭だけの開催でしたが、そんなイレギュラーな中でも委員が一致団結し、最高の桜歯祭を開催することができたと思っています。来年度は2日間開催できることを祈っています。(第4学年)



NU祭を終えて

実行委員長 宮下 昂大

本学部のNU祭では例年通り「いちにち歯医者さん」を開催しました。

今年は台風の影響で10月11日のみの開催となってしまいましたが、悪天候にもかかわらず多くの方々に来場していただきました。歯科治療の体験や歯科材料を用いた企画を多く開催しました。来場者の方々には企画を通じて歯科をより身近に感じていただけるきっかけになったのではないのでしょうか。

また、準備の段階では不安でいっぱいでしたが、先生方、事務の方々、そして実行委員の皆さんに支えられ無事に終えることができ、心から感謝申し上げます。来年も今年度の反省を生かし、より一層有意義なNU祭にしていけるように引き継いでいきます。

(第5学年)



駿技祭



実行委員長 倉内 生

今年度の駿技祭では、技工物展示とグッズ製作・販売の2つの企画を行いました。例年と同様に、シルバーアクセサリや歯型マグネット、Tシャツ等を製作し、昨年人気だったミニチュア義歯ストラップについては今年もご好評を得ることができました。

生憎の天候により、開催時間の短縮や日数が減ってしまったにも関わらず、多くの方にご来場いただき大変嬉しく思います。どうもありがとうございました。

この行事を通して学年を超えた交流が出来、文化祭を共に作り上げられた事は良い経験となりました。来年度は中心となる現1年生がさらに良い企画運営ができるよう、反省点を見直していきたいと思えます。

駿技祭の運営にあたり、ご協力頂きました先生方、桜歯祭委員の皆様、全ての方に心より御礼申し上げます。
(技工専門学校第2学年)

翔衛祭



実行委員長 山口 真由

翔衛祭では、例年と同様に食品販売と口腔衛生の2つの企画を行いました。台風の影響で1日みの開催となりましたが、食品販売のキャラメルポップコーンは大変好評で完売することができ、いらしてくれた皆さまに感謝の気持ちでいっぱいです。口腔衛生では歯磨きチェックと、歯の磨き方のアドバイスを行わせていただきました。

1年生、2年生で作りに上げた翔衛祭ですが、良かった点はもちろん、反省点も踏まえ来年はより良い翔衛祭になるようしっかり後輩に引き継いでいきたいと思えます。

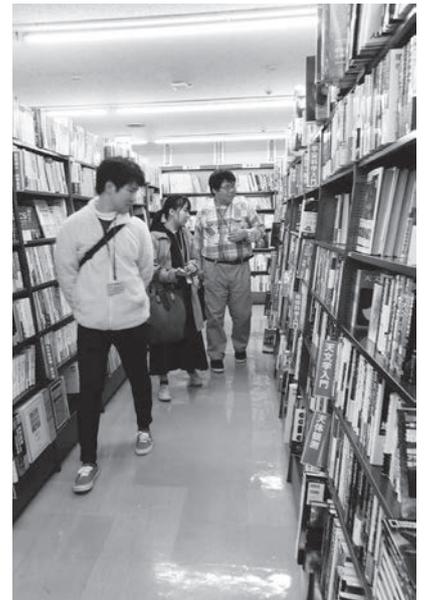
最後になりますが、翔衛祭を運営するにあたりましてご協力いただきました先生方、桜歯祭委員、NU祭委員、衛校生、各関係者の皆さま全ての方に感謝申し上げます。
(衛生専門学校第2学年)

選書ツアーに参加して

図書館事務課

昨年11月9日に三省堂神田神保町本店において、6学部(法、経済、理工、生物資源、薬、歯)合同の選書ツアーが開催されました。学生が書店内の本を自由に手に取り、図書館に置いて欲しい本を選ぶイベントです。今回は歯学部学生1名を含む40名が参加し、各自が思い思いの本を選びました。ツアー終了後、普段は異なる学部に通う学生同士の交流を深めるために「直観読みブックマーカー」というゲームが行なわれました。4名程のグループに分かれ、各グループで選んだ本から短い文章を抜き出し、その文章をもとに事前に与えられたテーマを当てるという思考力が試されるゲームでした。テーマと文章の選び方によってはユニークな組み合わせができ、学生と分館長の投票によって各賞が決定しました。

今回のツアーで歯学部学生が選んだ本とゲームの成果は、図書館閲覧室1Fに展示しています。次回はポスター等でお知らせしますので、学生の皆さんの参加を期待します。



父母懇談会



昨年12月7日(土)に歯学部父母懇談会が開催されました。

台風の影響で延期となり、今日の開催となりましたが多くのご父母が参加されました。

全学年で学年主任・クラス担任ほか多数の先生方により、個人面談が行われ、子女の学校生活や出席状況等の話がされました。

ラオスで「糖尿病×栄養学×医療ICT」 シンポジウムを開催

中島 一郎

2019年11月5～6日の2日間で、ラオス人民民主共和国（以下、ラオス）の首都ビエンチャン市の国立セタティラート病院の講堂において日本大学、ヘルスサイエンス大学、セタティラート国立病院による国際シンポジウム「Home-care medical system with telemedicine for patients with diabetes mellitus-Medical strategies employing medical ICT in South East Asia-(糖尿病患者のための在宅遠隔医療—東南アジア地域における医療ICT戦略—)」が共同開催されました。同シンポジウムは、ラオスの各国公立病院の医療従事者（医師、歯科医師、看護師）および医歯薬系学生に公開されたものです。在ラオス日本大使館、日本貿易振興機構等の日本の公的機関側もゲストとして参加されました。

東南アジア地域では、経済発展の一方で、非感染性疾患(non-communicable disease: NCDs)が占める割合が増えており、とりわけ糖尿病の蔓延が深刻です。糖尿病に対して、患者の栄養・運動・服薬などの在宅での健康管理が重要ですが、同国では医療従事者が絶対的に少なく（人口1,000人に医師数は0.8人）、健康管理支援が困難な状況があります。さらに雨季（6月～10月）などの医療機関への受診困難な時期もあり、糖尿病患者の在宅での健康管理を支援する抜本的な解決が求められていました。

第三期日本大学理事長特別研究として、2018年度から本学部が研究代表となり医学部、理工学部、経済学部、短期大学部（三島校舎）と学部連携し、ヘルスサイエンス大学とともに、東南アジア地域でのInformation and Communication Technology (ICT)を活用した地域医療の推進に資するとの共同研究プロジェクトを発足しました。

同研究プロジェクトでは、医療機関間 (Doctor to Doctor, D to D) と医療機関と在宅患者間 (Doctor to Patient, D to P) の情報提供・共有システム構築の2つ研究テーマから構成されています。本シンポジウムは、この“D to P”プロジェクトが主体となりスマートフォンを情報端末とした医療ICTの紹介とプロジェクト参加を医療関係者に呼びかけるため開催されました。シンポジウムプログラムでは、ラオスの国立病院、保健省の栄養センターから、同国の糖尿病患者の保健医療の現状と対策、問題点について報告されました。

日本大学からは医学部、三島短期大学の教員から糖尿病の成因・症状、栄養・健康管理、臨床統計データ等について講演があり、それらの情報共有を踏まえ、本学で開発された糖尿病患者の在宅医療支援のスマートフォンアプリのハンズオンセミナーが行われました。

シンポジウムはラオスの現状を踏まえ、積極的に講演に対する質疑応答を促すため日本語とラオス語の2ヶ国言語で行なわれました。日本とラオスとの医療関係者で糖尿病患者に対する栄養管理の在り方について熱心な議論があり意見交換がなされました。ハンズオンセミナーでは、実際のスマートフォン操作を通じて、さらに医療関係者の関心は高まったようでした。このシンポジウムの内容については、政府系の英字新聞「Vientiane Times」誌で翌日に記事として紹介されました。ラオスの国民にNCDsに関する問題意識や行動改善に関するヘルスプロモーションを基盤として、糖尿病の予防と治療に関する医療ICTが推進されることが期待されます。

（教授 医療人間科学分野）



リーダーズキャンプ

クラブ協議会会長 西川 昂佑



これまで私は、いちクラブの参加者としてリーダーズキャンプに参加していました。まだ下級生だった私は、先輩方にほとんどの議題についての決定を委ねていました。しかし今年は自分も4年生になり、クラブ協議会の会長としてリーダーズキャンプの進行をすることによって、改めて現在各クラブが抱えている問題や、勧誘、オールデンタルなどのクラブに関わるイベントに関する議題などがわかりました。それぞれの問題に対し全クラブの代表者たちが話し合い、学生が主となって

様々な事項を決定していくことができました。毎年のことですが、やはりリーダーズキャンプでは主に上級生や各クラブの主将が議題について話し合い決定していくことが多く、参加している下級生はほとんど話し合いに参加することがありません。自分も下級生の時は何の話し合いをしているのかもわからないまま参加していましたが、しかし、下級生にもしっかりと参加してもらい、下級生ならではのフレッシュな意見も聞いていくべきだと感じました。そのための進行の仕方も次の会長に引き継いでいければいいと思います。リーダーズキャンプはクラブ協議会の会長となって初めての仕事であったのでとても緊張しましたが、無事終わることができました。まだ会長になったばかりでこれからも勧誘など様々な仕事がありますが、歴代のクラブ協議会会長がまとめあげてきた日本大学歯学部クラブをしっかりとまとめていきたいと思っています。

(第4学年)

クラブ
だより

写真部

主将 李 邦秀

本年度から写真部の主将を務めることになり、幹部で協力しながら部の運営を務めさせて頂いております。写真部は普段の活動は多くありませんが、半年に一度の撮影会や夏合宿、桜歯祭などの少ない機会を通じて部員の交流を深めております。このように部員が楽しく過ごせていられるのも、ひとえにOB・OGの先輩方や上級生の先輩方のおかげと深く感謝しております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い致します。

(第3学年)



第51回歯学体解団式

歯学体正評議委員 吉田 浩子

第51回の解団式をもって私の正評議委員としての任期が終了致しました。評議委員として活動するのは2年という短い期間でしたが、その間に結団式や解団式を通して先生方や後援会、各クラブの皆様と関わったことを大変光栄に思っております。今年のデンタルの結果は準優勝と去年に比べ大躍進した結果となりましたが、来年こそは各クラブ一致団結して優勝を目指して頑張ります。

最後になりますが、サポートしてくださいました多くの関係者の皆様はこの場を借りて深く御礼申し上げます。

(第5学年)



オピニオン

○近年、歯科医療にデジタル技術や機器が次々に導入されてきています。光学印象やCAD/CAMによる補綴装置作製、エックス線診断、インプラント手術などで日常臨床に活用されるようになっており、この流れは今後も続いていくものと考えられます。一方、AI（人工知能）の話をあちこちで聞くようになり、医療の領域においてもビッグデータを利用した診断システムなどが報告されています。また、近い将来に機械やAIに取って替わられる職業についての話題も見かけますが、ある報告では代替されにくい代表的な職業の一つに歯科医師が挙げられています。それでも、AIによって歯科医療に変革が訪れる日も遠くないのではないかと考えています。

米山 隆之(教授 歯科理工学講座)

○歯科医療を取り巻く環境が大きく変化しています。医学の進歩により多くの病気から回復出来るようになり、また従来では難しかった治療も行えるようになってきました。一方高齢化社会の日本においては、病気を治療した後どのよう生きていくかが注目されるようになり、食べることや会話など人生の楽しみに直結する歯科医療では機能の回復や維持の重要性が増しています。さらに健康を維持するためには公衆衛生や予防医療も重要となります。学生の皆さんが臨床医となるとこのような様々な問題に直面する事になります。このため大学において歯学の知識と技術を習得することだけではなく、幅広い社会常識や倫理観を涵養することやクラスの友人やクラブの先輩後輩等との交流を通じての人間関係の構築なども心がけるようにして下さい。

米原 啓之(教授 臨床医学講座)

○五輪や万博等のビックイベントを控えるわが国では、感染症対策が重要です。世界中から多くの人々が来日するため、日本では流行していない感染症が持ち込まれる可能性があるからです。五輪を前に、エボラ等を想定しわが国でもようやく最も危険度の高いBSL4の病原体を扱えるP4施設が稼働しました。私は、BSL3のHIVの研究でP3施設の使用経験はありますが、P4は次元が違います。施設自体が隔離されているのは勿論のこと、実験室からの排気は高性能フィルターで2段階浄化。研究者は、宇宙服のような機密スーツを頭から被り、実験後には消毒薬のシャワーを浴びる必要があります。ここまでしても、自らの手でエボラウィルスを扱うのには恐怖を感じます。人類の歴史は感染症との闘いの歴史とも言われます。新興感染症が発生し続ける今日、この闘いが終わる日は来そうにありませんが、この時間

も自らの危険と隣り合わせで病原体と対峙している研究者がいることを忘れてはなりません。

今井 健一(教授 細菌学講座)

○国家試験の難易度が上がり、大学教育もひと昔まえと比べて一変した。聞くところによれば、学生が蓄えねばならない知識量は、我々中年世代が学生だった頃の約7倍だという。それだけ科学が進歩したということだが、これに伴い学生生活を謳歌するといった風潮はほぼ無くなってしまった。一方で、昨今日本人ノーベル賞受賞者が続出し、世界に対するわが国の知的貢献は絶大であると感じる。彼らに共通する点は何か？誰も注目しないこと、人のやらないことに取って着目し、人生をかけて挑戦してきたという点ではなかろうか？動物行動学者の竹内久美子さんが述べている。「ヘンなことを考えるやつが一番偉い」。こうした発想だけは失いたくないものだ。

浅野 正岳(教授 病理学講座)

○1980年に「ヒポクラテスたち」という映画が公開された。医学生をテーマにした映画で、院内生が臨床実習を通して医師の卵として成長していくお話である。当時私は歯学生であったが、自分の学生生活に重なる部分も多く、とても愉しめる内容であった。その中で、学生の一人が見知らぬ白衣の先生に院内で挨拶する場面がある。すると周りの学生が「知ってる先生？」と聞く。本人は「いや、知らん。けど、自分らが院内でいちばん年下なんだから、俺らより偉い人に決まってる...」と答える。当時、知らない先生と廊下ですれ違う時、挨拶すべきか迷うことがあったが、それ以降躊躇せずに挨拶するようになった。挨拶せずにモヤモヤするより、した方がずっと気分が良かった。

本吉 満(教授 歯科矯正学講座)

○英語のidentity (アイデンティティ) という言葉は、辞書で引くと「同一であること、自己同一性」などとあり、今ひとつピンと来ない。一部の教員の間でJSKの愛称で親しまれ、複数の教員が担当する前期の授業科目でたまたまアイデンティティがテーマとなっていた。学生によるグループごとの発表後に主担当の先生によるコメントがあったが、さすがに文系の先生だけあって日頃から哲学的に深く考察されているようだった。哲学的素養のない私はというと、数年前のあるとき「ローマ字読み」という我流の手法をこの言葉に適用することを思いついた。イデンチチ=遺伝の元。これぞ究極の身分証明！トンデモ解釈でも意味の核心がわかると同時に遺伝学の初歩も理解できたような気分がして、ジーン (gene) となった。

宮崎 洋一(教授 数理情報科学分野)

■ 附属専門学校から

歯科技工専門学校

平成から令和に移行した本年度は、歯科技工士教育の大綱化・単位化を迎え、本校でも新しい教育カリキュラムの導入となりました。松村学校長をはじめ、教員全員が長い時間をかけて準備してきたので、大きなトラブルもなく、学生は安心して授業を受けることができます。

昨年10月の駿技祭は、台風19号の影響で期日が縮小されました。雨風にも負けず、歯科技工士の卵ならではのアイデアに満ちた雑貨は、今年もご好評をいただきました。3年生はいよいよ国家試験を迎えます。不安のなか、学説および実技試験の対策に日々励んでいます。



歯科衛生専門学校

令和元年11月1日、日本大学歯学部百周年記念講堂において日本大学歯学部附属歯科衛生専門学校第61期生(2年生)の戴帽式が執り行われました。戴帽後、学生達が灯すキャンドルの灯りの中で宣誓を経て、校長式辞、歯学部長告辞、病院長訓辞、そして最後に校歌斉唱を行い、厳粛な雰囲気の中で式は終了しました。尚、1年生は相互実習が始まり、3年生は国家試験全員合格を目指して忙しい毎日を送っています。教職員一同、歯科衛生専門学校生が毎日充実した学生生活を過ごせるように、全力でサポート、および応援をしていきます。



令和元年度 歯学部第2回公開講座

中島 一郎

去る11月9日、歯科補綴学第I講座の池田 貴之専任講師と本橋 碧歯科衛生士を講師に、「入れ歯の使い方～入れ歯を詳しく知りましょう～」をテーマとした令和元年度歯学部第2回公開講座が第3講堂にて開催されました。当日は、参加者数が111名と講堂内は大盛況でした。平成28年の歯科疾患実態調査によれば、義歯装着者の割合は、部分床義歯と全部床義歯の割合を合わせると、65歳以上で39.9%と約40%を占め、85歳以上では92.6%に達しています。今回の講演では、池田先生から歯科補綴治療の基礎的事項として義歯の構造や作り方、治療等について事例やデータを挙げ、義歯に関しての講演がなされました。本橋衛生士からは、義歯の清掃や管理方法についての情報提供がありました。会場の参加者から熱心な質問があり、終了後のアンケートでも、参加者の満足度が高かったという結果が得られました。

本年度最後の公開講座でしたが、関係各位のご尽力に、心から感謝申し上げる次第です。

(教授 医療人間科学分野)



佐藤会

昨年11月17日(日)に、本学部創立者の佐藤運雄先生のご遺徳を称えて毎年開催している佐藤会が行われた。当日は本学部ならびに同窓会より役教職員が佐藤先生の菩提寺の青松寺へ墓参し、13時から式典を歯学部創設百周年記念講堂で挙行了。全国から同窓会員と関係者一同が参集し、名誉会員記贈呈、叙勲者表彰、佐藤賞授与が行われた。本年度の佐藤賞は学内から武市収先生(歯科保存学第II講座准教授 学35)「難治性根尖性歯周炎におけるEpstein-Barr ウイルス感染に関する研究」、学外から大谷一紀先生(東京都開業 学45)「セラミックスおよびコンポジットレジンを用いた自然感のある修復治療」に授与された。

NewsPlus α

☆図書館開館時間の延長

昨年(2019年)の11月5日(火)から本年(2020年)1月31日(金)までの間、平日の開館時間が現行の21時から22時まで延長される。

☆第51回全日本歯科学学生総合体育大会解団式並びに、第52回全日本歯科学学生総合体育大会冬期部門結団式

昨年10月17日(木)18時から1号館大講堂において行われ、役教職員、クラブ顧問の参列の下、関係クラブ学生が総合優勝奪回へ向けて健闘を誓った。冬期部門は、12月28日(土)よりラグビーフットボール部門が開催され、その後順次開催される。

学 事

令和2年度入学試験

【一般入学試験(N方式第1期)〈日本大学が実施する入試〉】

- ◆募集人数 5名
 - ◆出願期間 令和2年1月5日(日)～1月24日(金)
 - ◆試験期日 令和2年2月1日(土)
 - ◆合格発表 令和2年2月12日(水)
 - ◆入学検定料 24,000円
 - ◆選考方法 ①数学①「数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学A・数学B(確率分布と統計的な推測を除く)」②理科「物理基礎・物理」、[化学基礎・化学]、[生物基礎・生物]のうちから1科目選択
③外国語「コミュニケーション英語Ⅰ・コミュニケーション英語Ⅱ・コミュニケーション英語Ⅲ・英語表現Ⅰ・英語表現Ⅱ」
- ※理科において、医学部を併願している場合は、第1解答科目のみを合否判定に使用する。

【一般入学試験(A方式)〈歯学部が実施する入試〉】

- ◆募集人数 57名
 - ◆出願期間 令和2年1月5日(日)～1月24日(金)
 - ◆試験期日 令和2年2月3日(月)
 - ◆合格発表 令和2年2月12日(水)
 - ◆入学検定料 50,000円
 - ◆選考方法 ①数学「数学Ⅰ・数学Ⅱ」②理科「物理基礎・物理」、[化学基礎・化学]、[生物基礎・生物]のうちから1科目選択
③外国語「コミュニケーション英語Ⅰ・コミュニケーション英語Ⅱ・コミュニケーション英語Ⅲ」④小論文(60分・600字以内)⑤面接
- ※理科の選択科目において、平均点に大きな差が生じた場合は、得点調整を行う。

【一般入学試験(C方式第1期)〈大学入試センター試験を利用する入試〉】

- ◆募集人数 10名
 - ◆出願期間 令和2年1月5日(日)～1月24日(金)
 - ◆試験期日 ◇大学入試センター試験
令和2年1月18・19日(土・日)
 - ◆合格発表 令和2年2月12日(水)
 - ◆入学検定料 24,000円
 - ◆選考方法
◇大学入試センター試験では、下記の教科・科目を受験すること。
①国語「近代以降の文章のみ利用」②理科「物理」「化学」「生物」のうちから1科目選択 ③外国語「英語」
- ※理科(基礎を付していない科目)において、2科目受験した場合は、第1解答科目のみを合否判定に使用する。外国語「英語」において、リスニングの成績は利用しない。

【一般入学試験(C方式第2期)〈大学入試センター試験を利用する入試〉】

- ◆募集人数 3名
 - ◆出願期間 令和2年1月5日(日)～2月18日(火)
 - ◆試験期日 ◇大学入試センター試験
令和2年1月18・19日(土・日)
 - ◆合格発表 令和2年3月2日(月)
 - ◆入学検定料 24,000円
 - ◆選考方法
◇大学入試センター試験では、下記の教科・科目を受験すること。
①理科「物理」「化学」「生物」のうちから1科目選択②外国語「英語」
- ※理科(基礎を付していない科目)において、2科目受験した場合は、第1解答科目のみを合否判定に使用する。外国語「英語」において、リスニングの成績は利用しない。